

清元 四君子 (明治三十年(1897年)八月二十日初演)

作詞 鎌田徳之助 作曲 二世清元梅吉

鶏の八聲も涌きて 才華やかに

煌めき出づる初日影

岩戸の隙の見え初めし

神代も斯くや明らけく

治まる御代の空 長閑けく

咲く梅が香も手弱女の

袂に通ふ都の春

大宮人も暇あれや

桜かざして 如月や

弥生の花の白雲も

いつか青葉になりぬれば

自からなる雨露の

恵みに高く生ひ出でて

誰が脱ぎ掛けし藤袴

風の随に薫る香の

深きぞ花の操なる

秋待ちて咲く菊の花

下ゆく水の流れ汲む

人も齡を延ぶる言ふ

その故事も名にし負う

東の野辺の黄金草

誰が貢の数に積む

それは花のしめやかなる

また此君と名付けしは

霜をも凌ぎ

雪にも折れず

雲井に茂る千代のかげ

竹の園生の末 長かれと

君が千歳を祝ひける

実に佳色ある御代の春

